

実験主義教育学に於ける「自己実現」

金丸 晃 二

序

実験主義教育学と言われる John Dewey の教育学がその哲学的基礎として実験論理学を有していることは、改めて指摘するまでもないことである。この実験論理学、知識の論理とは、人間を不安定と安定、不確実性と確実性の織りなす世界にさらされている危機的、冒険的存在としてとらえ、まさにその存在基盤の脆弱さの故に新たなる状況との出会いに於いていかに能動的、実験的に確実性を探究し保証していくかという方法論であった。その立場に於いては、何よりも先ず経験を重視する。そして、人間と環境の相互作用としての実践的经验の中に認識の発展=学習、経験の再構成、自己変革を位置づけようとする。経験は、人間と自然の相互作用の複雑な出来事であって、単なる主観的投企ではない。実験的经验主義の立場に於いては、すべての二元論(精神と自然、理論と実践、認識作用と認識内容)は排せられるのである。こうした実験的知識の論理に支えられた経験過程は、「成長」であり、デューイ教育学の中核である。私は、デューイの教育学で言う「成長」は、英国の哲学者 Thomas Hill Green の主観論的自己実現との関りで提起されたデューイ独自の自己実現論の思想に他ならず、彼の実験論理学にもとづく教育学、倫理学、社会哲学、心理学、芸術論の諸領域を貫くものと考えている。小論では、デューイの教育学の基礎としての「自己実現」=「成長」の構造がいかなるものかを考察したい。この為に倫理学の領域に於いて、Thomas Hill Green の自己実現の立場と対応して、デューイの習慣-衝動-知性の相互連関的分析をふまえた自己実現論を取り上げることにする。この倫理学の領域で提起された自然主義的经验主義の自己実現論は、彼の道德教育論の確固とした枠組を構成しているのである。

I

デューイがグリーン思想に出会ったのは、彼の学業生涯の初期であった。彼とグリーン理想主義的倫理学との関りは、後の論理学、倫理学、教育学構成の序章をなすものであった。というのも、その関りを通して、デューイは、経験概念と実験の論理を結合させた自然主義的经验論を展

開し、主観的観念論を克服する意図を持っていたからである。以下、我々は、グリーンの合理主義的立場の自己実現論を普遍意識 eternal consciousness (自我・精神)の指定という基本点から考察することにする。

「Thomas Hill Greenの倫理学は一個人の諸要求に適うようにドイツ合理的観念論の実践的解釈をすることを目指していた」^{注1)}と言われるようにグリーンは、カント、ヘーゲルの影響を受け、それを批判しながらも、基本的には、カント倫理学と同じ立場の倫理学を展開した。それは認識論を基礎とした自己実現の体系的倫理学であった。カントの影響は、彼の著作 Prolegomena to Ethics (1883)の冒頭にある二つの間に容易に看取できる。この問とは、「自然に関する知識は、それ自体自然の一部または産物であり得るか」或いは、「自然に関する知識は、人間の中に自然的ではないところの一つの原理を含んではいないか」という認識論上の問題と「この原理はまた、道德的理想の意識としてあらわれないか」という倫理学に発展した問題である。

最初の問に関するグリーン認識論の基本原理は、普遍意識が、個々の経験の中に自らを実現、顕現するというものであった。(認識論でいう普遍意識は、悟性を意味する。グリーンは、カントの直観の形式<時空間>と悟性の形式<カテゴリー>を統一して「関係」relation でそれを表す)この普遍意識は、人間の内に存在し自然界、道德界に自らを実現・再生する。人間は単なる感覚や感じでは、自然の知識を得ることは不可能であり、自然そのものの客観的・体系的知識を得るのは、かかる普遍意識が作用し、バラバラの現象を秩序ある全体へと総合することによってはじめて可能である。この立場は、普遍意識が経験の産物ではなくして自然に起源を持たない認識主観であって、カントが「悟性が自然を構成する」という場合と同じ観念論の立場である。しかし、グリーンは本体論に於いて、カントが不可知の実体である「物自体」を仮定して陥った理性-感性の二元論を取り上げて、「物自体」を除去し両者の統一を試みる。その限りに於いて、グリーンには理性-感性、概念-知覚の二元論は克服されていた。^{注2)}

1) Rogers ; R. A, Short History of Ethics. p. 282

2) Green ; T. H, Prolegomena to Ethics §38-§54 (p. 54-65)

こうした主観の内にある精神的原理 *spiritual principle* を基礎にして、グリーンは倫理学を構成しようとする。ここに於ける一般的立場もカントに極めて近く、形式主義、人格説—人格の価値、理想を説くのである。認識論の基本原則を受け継いだ道徳論の立場は、欲望 *desire* と道徳的行為の分析に最もよく表わされている。即ち、グリーンは、人間と動物に於ける欲望の規定の差異から分析して、その差異を人間の普遍意識に求めるのである。下等動物が、単に自然的欲望そのものの存在であるのに反して、人間には、自然的欲望を自我が対象化し規定する意識 *self-objectifying, self-determining consciousness* が作用する。ここに人間と動物の決定的差異が在り自然の知識が自然そのもの、或いは感覚に還元不可能であるとまさに同じ理由で、グリーンは、道徳的経験の可能性を普遍意識(自我)による欲望の規定に求めている。(この二つの区別は、「個々の欲望の満足」 *satisfaction of particular desire* と「自我の満足」 *self-satisfaction* で表現されるが、注3)グリーンは、認識論でカントの理性—感覚の二元論の統一を試みながら、道徳論で理性的自我と感性的自我の二元論、*sein-sollen* の二元論をくり返す矛盾に陥った。ここにグリーンのカント的二元論の残滓が見出される。注4)この区別は、認識と道徳的活動に作用する普遍意識の同一性を示したものであり、従って第二の間も普遍意識の自己実現が基本原理になる。今まで概観したことから既に明らかのように、普遍意識は、道徳論に於いては理性として自己を客体化し規定するところの規範意識である。注5)道徳の動機は、普遍意識の付与する理想・目的に従う統一としての「自我の満足」 *self-satisfaction* に於いて成立つ。道徳的行為がこの「自我の満足」にあるとすれば、カント的義務の動機説(形式主義)義務の概念、人格説、意志の自由に発展するのは論理的必然である。グリーンは、こうした自然的欲望の上に作用し、それを統一する普遍意識をもって「自己実現」とし、さらには、「能力の実現」、「ある観念の実現」 *realization of idea* と言い換える。こうした普遍意識の経験を通しての自己展開の産物、無限に続行する意志行為、道徳的経験の歴史的産物が人間の品性 *character* である。注6)品性とは、従って時間的であり、普遍者、絶対者としての普遍意識は、超時間的なものである。グリーン自己実現は、このような主観的、観念的自我を指定

することによって道徳的経験の可能性を問い、理想的自己を実現する為の実践的行為の理論として提起されたのである。

Ⅱ

以上、我々は、「普遍意識」(自我)を中心にグリーンの観念論的自己実現の基本的立場を概観した。我々が、デューイの自己実現との対応に於いてグリーン思想に触れる場合、基本的問題は、普遍意識の措定とそれに連関する能力(精神・知性)、及び理想・目的の固定性の問題であろう。それを具体化すれば、次のような問題である。即ち、具体的経験の中に自らを実現していく普遍意識、或いは理想的自我(未実現の自我)と品性としての実現された自我の二元論—普遍意識の一般的理想・目的それ自体を動機として個々具体的行為はどのように成り立つか、又は、理想としての未実現の自我は、個々具体的状況の諸要素、価値感情の反映としての自然的欲望、傾向性を否定する時どのように実現されるかという実践的行為の問題、さらに、これに連関した理想・目的の固定性の問題である。我々は、これらの問題を行為の立場に於いて、また人間性=衝動—習慣—知性の構造連関の社会心理的分析を通して考察することが可能であり、そうすることによってデューイの自己実現の構造を明らかにすることができる。グリーン的主観主義批判の武器は、言わば、行為・人間性の心理学的分析である。

さて、具体的に先ず自我の一般的立場を行為との連関で対応させる。グリーンは普遍意識(自我)とは、先に見たように自らを経験の中に実現してゆくという、或いは「個人あって経験ある」という観念的実体的自我であった。(デューイは、グリーンは自我を「措定され、固定したシェーマ、アウトライン」と表現している。注7)デューイの自然主義的経験論に於いては、こうした実体論的自我は否定され、自我は具体的な特殊な活動として「*there and then*」にあるもの即ち生成過程そのものとして扱われている。換言すれば、それは、*growing self* であり、環境との相互作用を離れ、自然と独立した実体ではない。具体的行為との連関で *growing self* とグリーンは自我の概念と行為の連関の差異を明らかにする時、我々は、デューイの諸著作に興味深い二つの言葉を見出すのである。即ち、自我を

3) *ibid.* § 88 (p.105), cf. 河合栄次郎「トーマス・ヒル・グリーン思想体系」p.386—396

4) Dewey; J, *Green's Theory of the Moral Motive* (Early Work. Vol.III p.161)

5) Green; T. H, *Prolegomena to Ethics* §202 (p.241)

6) *ibid.* § 108 (p.125)

7) Dewey; J, *Self-Realization as the Moral Ideal* (Early Work. Vol.IV p.43)

実体化する立場を action for self, 自然的過程としての growing self の立場を action as self とするものである。注8) デューイは、この言葉を様々な文脈で用い、多面に意味の広がりを持たせ、それ故かえって曖昧さを残しているが、この言葉の後者によって、伝統的哲学の仮定する「存在としての意識」の否定を意味し、「機能としての意識」のみを取扱う立場(経験主義)を表示するものと解釈できる。後者の意識は、それ自体環境を表すものであり、それ故に自我は「there and then」にあるものである。

action for self の場合、先にグリーンには、普遍意識(自我)としての未実現の自我と品性として実現された自我(経験的自我)の絶対的区別があることを指摘したが、こうした立場に於いては、個々具体的行為は、未実現の理想的自我(シェーマ、アウトライン)を満たすところに意義があり、行為そのものは、固定したシェーマとしての自我の手段になってしまう。未実現の遠い理想的自我からすれば、その都度の個々の行為には、たとえそれがその時の最善のものであれ、満足がない。具体的行為は、常に「固定した自我に利益と保障と慰めを与える」注9) のみなのである。実現の過程には、その都度の状況の最善による満足がなければ、さらなる飛躍の契機はない。こうした立場に於いては、理想・目的は観念自体として固定してしまわざるを得ない。禁欲・抑制の機制となり、それ故認識及び自我の経験を通した progressive な拡大はなくして、むしろ regressive な狭隘化の道である。認識の側面からすれば、その実践過程は、演繹の論理に支えられ、帰納の論理はない。デューイの立場に於いては、道徳の諸問題に科学的方法を適用しているが故に、この認識の一面的論理は重要な批判の対象となる。また倫理の側面から見る時、理想・目的が前景に置かれることによって、必然的に禁欲主義、教訓主義 preceptualism の道徳観に帰着するのである。action as self の経験的立場は、こうした自我の実体化によるすべての一面的把握に対する批判である。ここでは、実現された自我と未実現の自我は、相対的区別である。先に述べたように、主体は「there and then」にあり、「状況」の変化と共に意識は流れている。それ故、growing self という場合、「実現された自我と未実現の自我のリズム」がその過程であり、個々の行為は、固定した自我の枠組を満たす手段ではない。その都度の状況に直面し、そ

に於いて自己限定することによって、逆に自己の枠を破壊する経験的立場である。従って、この過程に於いては、理想・目的は固定化を免れ、その都度の具体的行為を通して引き出された progressive に発展していく機能的理想 working ideal である。機能としての意識、自我の経験の立場であるが故に、自我全体が現在の状況に自己を見出し、特殊・個別的活動に没入している。そこでは、理想・観念それ自体が中心的役割を以て実践的行為を成立せしめるのではない。現在の状況に於ける特殊な活動への没入に自我=行為の定式化が成り立つのである。

二つの言葉の意味の広がりデューイとグリーンとの相違を見たが、デューイの立場には、他の側面から見る時、一つの立場が表明されている。即ち「現在主義」、「現在の自己」の立場である。現在の行為(自我)というのは、単なる現在の行為ではなく、現在の中に過去と未来を孕み、未来に媒介される可能性を持つ。換言すれば、現在の行為は、過去の蓄積された意味体系、尺度なしに存在することは不可能であり、また、未来も現在なしには在り得ない。現在という視点からすると、G. H. Mead の指摘する如く、未来は勿論、過去も諸可能性なのである。注10) 現在の行為(自己)の立場は、かくして、未来と過去と現在の循環的相互規定の上に成り立ち、「十全な現在」なくして、自己実現は不可能なのである。W. James は、次のように述べている。「心 mind は、あらゆる段階に於いて、同時的諸可能性の舞台である。これらの可能性を相互に比較し、そして注意の強制的、禁止的作用によって、それらの或るものを選択し、残りのものを抑止するところにこそ意識は存する」注11) この意識は機能的立場であって、その選択的性質は、同時に推理作用、道徳的活動を説明するものである。我々の目的的活動に於ける一つの選択-興味・本質を表すが一は、推理過程そのものであり、そうした生活過程の中の多様な選択は、単なる現在の非連続な点ではなく、かえって我々の未来の在り方を規定し、「私」を形成してゆくという非連続を含む連続の流れの意味を有する。こうした所謂現在主義は、pragmatist に共通した立場である。この立場からして、デューイの「現在の自己」「現在主義」の立場とグリーンとの具体的行為を越えた自我を仮定する立場を対応させる時、どのような教育的意義があるであろうか。我々は、グリーンの主観主義の中に「準備説」を見出

8) Dewey ; J, ibid. p.52 cf. Ethics (1908) p. 377

9) Dewey ; J, Human Nature and Conduct p.131

10) Mead ; G. H, The Philosophy of the Present p.90 p.173 cf. Dewey; J, Experience and Education p.51

11) James ; W, Principles of Psychology Vol.I p.288

すことができるのである。注12) 観念的自我の予断は、progressiveに拡大していく『探究』の桎梏である。デューイは、グリーン倫理学に於ける『準備説』を克服することを通して、経験主義、現在主義の立場、即ち、現在の生活そのもの、具体的な現在の活動そのものに目的を見出し、連続的経験の再構成を意図するという立場を教育に適用し、それを教育の一般的基礎原理としたのである。

自我と行為の同一性からデューイの自我の一般的立場を述べたが、意識-自我-精神が近代哲学に於いて同意義を表わすように、自我の問題は、同時に能力(精神・知性)の概念の相違に導かれる。普遍意識は経験の中に自らを実現するとグリーンが述べる時、そこでは、既に人間の内に行為に投企する精神(知性)が固定したものと仮定されている。デューイの立場に於いては、こうした与件として予断された能力の概念は否定されねばならない。デューイの立場は、生物学を基礎とした自然的相互作用を母胎とするものであり、生物学的機能概念からの能力(精神・知性)の発生論的立場である。これは、調整 co-ordination によって表わされる。注13) デューイの growing self という概念は、自我という言葉を用いる時、「自己実現」、自我論と一体となった知性(精神)の発生論から見る時、彼の教育で言う「成長」growthの概念に導かれる。

先に、グリーンが、「自己実現」を言い換えて「能力、可能性の実現」と表現したことを指摘した。デューイの立場からは、この能力が固定した既成の与件、能力一般と解釈され得る。グリーンに於いては、能力(理性)は、自然的欲望を体象化し、一般的理想・目的(自我全体 a whole self)そのものから行為を規定する普遍意識を意味し、又、理想一般、可能性一般としての「善意志」である。我々は、勿論、未だ実現されていない理想、目的、及び可能性が人間に存在する事実を認めることはできる。しかし、能力一般という概念は否定しなければならない。というのも、能力一般というものが存在するならば、人間には、決して意識されないからである。デューイに於いては、能力とは、特殊な、具体的『あれ・これ』の能力であり、具体的活動そのものである。即ち、ここに於いても、能力=行為の定式化が成り立つ。人間の具体的活動は、『実行の条件』condition of exercise、或いは環境の諸条件を離れることはできない。行為者と環境は不分離の過程である。さらには、具体的行為とは、特殊な変数条件を有する時空間上の一点

という「状況」と個性化した行為者を意味する。発生的知性・精神の立場は、この主体と環境の相互作用の中の出来事としての調整 co-ordinationに求められる。(この概念は、調節 adjustment とその下位概念である assimilation、adaptation を内容的に表わす)、これを先の自我という側面から述べれば、従来の自己概念を新たな状況の諸条件の光に照して再構成するということであり、また知性(能力)は、新旧経験の衝突の事柄としての「問題的状况」に於ける「探究」の中から派生する。デューイにあっては、グリーンに於ける禁欲・教訓主義に対立して、この能力(知性)の発生論的立場とそれと合体した実験の論理が、道德活動、及び道德教育論の理論的基礎になる。以上に述べてきたように、デューイの立場-経験的自然主義、自然主義的経験論、自然主義的ヒューマニズム-に於いては、主観的自我の措定、及びそれから帰結する禁欲・教訓主義の倫理、準備説は否定され、自然的相互作用の産物としての growing self 及びそれに対応した発生的精神・知性論が提起されたのである。それは、とりもなおさず、『精神を「自然化」し、思考作用を「生物学的機能」として記述する企て』であり、注14)それがまた倫理学構成の礎石になっているのである。

III

デューイの自己実現論は、グリーン思想との関りに於いてその方向が示されたのであるが、彼の独自の分析は、人間性の社会心理的分析により一層明確化され、強化された。人間性の分析は、衝動-習慣-知性の相互連関の分析であり、彼の実験論理にもとづく倫理学の要石として極めて重要な意味を持っている。我々は、次に道德的状况に於ける行為の分析をこの衝動-習慣-知性の相互連関から明らかにしよう。この分析が、結局はグリーン理想主義倫理との相違を浮彫りにすることになる。

自己実現を人間性の分析の観点から考察する時、我々は、デューイの特徴的概念を二つ取り上げることができる。即ち「衝動の媒介」mediation of impulse、「自我の媒介」mediation of selfである。この二つの概念は、一つの経験の全一過程を示し先の「状況」に於ける行為の心理学的分析と対応している。先ず、前者の概念をデューイの思想体系から包括的に考察する。デューイに於いては、衝動は、人間の最も根源的生命過程のエネルギーである。全ての経験

12) Dewey ; J, Self-realization as the Moral Ideal (Early Work Vol.IV p.43)

13) Dewey ; J, The Study of Ethics : A Syllabus (Early Work Vol.IV p.232) (以下A Syllabusと略す)

14) C. W. ミルズ 社会学とプラグマティズム p.218

の発端は衝動であり、行為が新しい要素を含む限り、それは衝動的である。実験倫理の反省過程の発端は、この「衝動の表出」にある。道徳的状況に於ける反省は、この衝動の対象化の過程である。反省は、行為の延期、自己統制を意味しこの過程に於いて、「目論見」end-in-viewを持たない衝動が目的を形成する。デューイに於けるこの目的の形成は、実験の論理に支えられている。目的を形成する主体は、具体的には経験によって蓄積された意味体系としての習慣である。端的に言えば、衝動を方向づける手段、道具は、経験の意味体系＝習慣である。（デューイの習慣の概念には、様々の意味がある。例えば、人格、性格、態度、意志、経験的自我、能力、思考のカテゴリーなどをあげることができる。）反省的思考作用を習慣の積極的機能から捉えるところに独自の見解が示されている。この過程に於いて、自我的部分的表現として誘発された衝動が意味体系＝習慣＝諸自己（selves）と相互作用するところに道徳の心理学的基礎が見出される。そして、衝動が諸経験に逆参照back-referenceすることが「衝動の媒介」になる。^{注15)}ここで衝動は、意味を得て観念化されることになり、その性質を改変する。衝動と経験の帰結との連関からすれば、衝動は、経験の帰結を通して次々とその性質を改変し、意味を纏い、習慣として結晶化する。衝動と習慣との連関からすれば、個々の衝動は、習慣を踏み台として誘発される。習慣の積極的、原初的力の意義は、こうした反省的思考作用に於いて行為に統一を与えるところに存し、そこに、「習慣の一次性」、「衝動の二次性」が認められるのである。先の調整は、かかる反省的過程の潜在的広がりを持つ状況との連関に於いて調整するところに知性（精神）の機能と発現がある。^{注16)}この再調整・再構成としての衝動の媒介は、先に指摘したように与件datumではなく課題problemであって、それ故、行為は、単なる主観的投企ではない。言い換えれば、「realize」は、既に措定された実在を外に出すということではないのである。デューイの義務の概念は、この反省的思考＝批判的期間の過程の中にある。「批判的期間は、義務の意識が行為に規範的に入り込む程度を決定する」^{注17)}義務の根拠は、状況の中に存在し、又、人間の「自由」も状況の諸要因、問題の知的、科学的統制の程度に依存するのである。こうした行為の成立過程にある人間性を構成する習慣、衝動がなければ、理想・目的は、

実現の手段を持つことはない。デューイの道徳の心理学的基礎は、このような意味の広がりを持つ「衝動の媒介」に見出すことができる。この概念は、さらに「自我の媒介」に発展する。^{注18)}自己実現、或いは、経験は、この二つの概念を全体的過程として考察されねばならない。「自我の媒介」は、「衝動の媒介」の次のstageに位置づけられる。「衝動の媒介」が反省過程、実際のオーバートな行為までを表わすならば、「自我の媒介」は、それ以降のオーバートな行為の持つ現実の帰結が主体に反作用する過程と再体制化を意味する。従って、両者は同一過程のstageの差異である。そして、この全的過程が「一つの経験a experience」をするということであって、この時初めて自我は現実化する。即ち、自我＝実現なのである。実際の帰結が経験の結果としてそれを誘発した衝動に反作用する場合、一つの経験の帰結は、単に衝動＝帰結の1対1の対応関係とすることはできない。経験の進行と共に、一つの経験の意味が、自己全体の意味体系、構造を変容する非連続的经验があるからである。デューイは、連続的经验の再構成を主張することは多いが、一方で、一回性、独自性を持つ経験の存在とその重みを十分指摘していることが理解されねばならない。「自我の媒介」の概念は、そうした内容を持つものであり、覚醒、或いは回心のデューイ的表現である。（デューイの具体例は、習慣、能力、好み、人生に対する態度、目的形成の仕方などである）さらに又、この概念には、衝動という自我の一部分と自我全体の止揚という弁証的意味と「規準が行為をテストする」^{注19)}という実験倫理の立場を看取することができるであろうし、衝動及び自我の媒介の全体的過程の中で「再構成」、「成長」の意味も明らかになるのである。かかる「衝動の媒介」、「自我の媒介」というダイナミックな、スパイラルな過程が自我の発達過程である。いかなる行為も自己形成作用を持つ。状況一般、行為一般は存在しないからである。そして、個体の生物学的枠組＝生命過程に於ける自己更新の説明概念である「衝動の表出」は、自我の拡大と実現を意味するが故に、「自己実現の過程」process of self-realizationである。^{注20)}デューイの衝動論は、かくして、自己実現の概念に極めて積極的な意味を持つ。衝動は、古来、倫理学に於いて何らの積極的評価を受けなかった。衝動それ自体は、価値的に無記であり、それが価値的評価を受けるのは、行

15) Dewey ; J, A Syllabus (Eary Work Vol.IV p.237)

16) ibid. (p.237) cf. Moral Principles in Education p.13

17) ibid. (p.316)

18) ibid. (p.288)

19) ibid. (p.291)

20) ibid. (p.244)

為の達成する価値的評価とそれによって形成される自我の種類に依存するのである。衝動は、生命過程に於ける不適応の表現として、従来の意味体系＝習慣体系を破壊し新たな意味領域へ突出するエネルギーである。しかし、その破壊と再構成には、実験的知性が介在しなくてはならない。かくして、デューイに於ける道徳は、「抑圧ではなく指導 direction の事柄」注21)となり自己統制の技術性が強調されてくる。そのような道徳観は、生物学、心理学、論理学の結合によって構成されていた。

以上に考察したような調整としての反省過程—心理学と論理学の結合—に作用する衝動と習慣及び知性の相互連関を見る時、グリーンは道徳の動機説は、一面性と不徹底を免れ得ない。それは、欲望をそれ自体の満足に帰するとして捨象し、さらに傾向性(習慣)が行為に果す原初的力の意義を看過しているからである。人間の血肉となる習慣を無視して理想、目的の実現はあり得ない。習慣は、思考作用に積極的意味を持つにしても、逆に固定すれば、意味体系として前方を見る目を遮るベールであり、客観的諸条件との関連で再構成しなければならぬ。再構成は、「次には何を」 という技術的形式をとる。デューイによれば、理想・目的それ自体という立場は、「魔術の原理」 the principle of magic にすぎない。注22) グリーンは誤謬は、衝動、欲望の持つ経験の帰結との連関と媒介を分離したこと、在るものを越えて出ていく衝動が自我の拡大に果す役割と習慣の再構成に持つ根源的力を看過したことである。

IV

グリーンの自己実現の倫理とへの対応に於いてデューイの自己実現論の構造を見てきたが問題の派生は、何よりも観念的自我の措定の問題であった。注目すべきことは、デューイが、グリーンの自己実現論に於いて仮定された実体的自我、或いは自己意識の起源、発生を問題にせず *growing self* という自我の変容の過程を記述したことである。勿論、その記述の趣旨、立場は、自我の発生を自然的、社会的相互作用の中に位置づける発生論的立場には違いない。こうした自己意識(反省的、構成的知性)の起源を問題にしたのは、同じシカゴ学派の G. H. Mead であった。彼は、自己意識の起源を説明し得ない個人主義理論—グリーンも自己意識の起源に対する答はないと言明した—を批判して、自我、精神の起源を自然的、社会的相互作用に於ける vo-

cal gesture; play; game から体系的に記述した。注23) デューイの記述は、自我論としてミードのような体系はない。Jane Dewey の『デューイ伝』によれば、むしろ、ミードの自我論をデューイが高く評価し、シカゴ時代以降の思想の展開に受容したことが知られるのである。我々は、次にミードとの関連に触れながら、自己実現の中核にある主我 the "I" の問題を取り上げ、自己実現の社会的側面を考察しよう。

ミードの自我の起源の分析に横たわる原理は、態度取得 attitude-taking, 役割取得 role-taking 理論である。彼は、社会行動主義の観点から自己意識の起源が社会的であり、社会的経験、社会的コミュニケーションを離れて、自己意識は発生しない、即ち精神的存在にならないことを提起した。従って、彼の出発点は、主観的自我を措定する個人主義理論の批判にあったのである。「自我は、それ自体を他者に投企するのではないということ認識することが重要である。他者と自我は、社会的行為の中で共に発生する」注24)と述べているように、彼の役割取得理論は、人間を何よりも先ず社会的存在と見做す。そのコミュニケーション過程に於いては、「…個人は、彼が一自我である以前に一他者である」。注25) この社会的立場からすれば、自我と他者は、孤立した主体ではない。自我と他者は、one system であって、その one system = 相互主観性の中に於いてまた one system を母胎として自己形成をする。自然的、社会的相互作用を離れて、自我の現在化は不可能である。Mead によれば、我々は、自己自身に關ると同時に他者に關る存在であるが故に、我々は自己自身を批判し得る。Mead に於ける自己(客我 the "me") は共感 sympathy, 同一視 identification, 役割取得を通して社会集団に共通な行動の原理、価値体系を内面化し、組織化し、自己自身の行動の原理、価値観とした社会的性質を持ち、客我は、経験の過程で主体の批判者、規範意識として主体に行動の形式を与えるものであった。それは、従って、因襲的、習慣的なものである。こうした社会的適応過程からすれば、人間は、社会の奴隷にすぎなくなるであろう。pragmatism は個人的基礎を失ってしまったと批判する人は、こうした人間の社会化の過程を一面的に解釈しているのであり、正当なものではない。Mead に於いては、社会化と同時に個性化、社会変革の原動力を意味する主我 the "I" の概念(Dewey に於いては、individuality; subjec-

21) Dewey ; J, Ethics (1908) p.368

22) Dewey ; J, Human Nature and Conduct p.21, p.27

23) Mead ; G. H, Mind, Self and Society p.144-p.164 The Philosophy of the Present p.168-169

24) Mead ; G. H, The Philosophy of the Present p.169

25) ibid. p.168

tivity)があり、確固とした個人的基礎を形成しているのである。自己が社会的に創られたものである一方、主我は、自己に対立し、固定性、因襲性を打破する積極的意味を持つ。主我は、未知への飛躍を表わす衝動に基づくのである。それ故、経験に「斬新さ」、「好奇心」、「興味」を与えるのは、主我の衝動性による。Meadは、その性質をふまえて、主我は「自由と首導性の感じを与えるもの」^{注26)}と述べている。Meadの社会的自己実現は、こうした「主我と客我の対話」=反省的思考、自覚的知性の中に現れる。客我に対する主我の優位は、「自己否定」であり、それは、同時に社会の否定につながる。というのも、Meadに於ける自己(客我)は、他者 the other 及びそれから発展・統合された「一般化された他者 the generalized other」に他ならないからである。ここに人格の改造と社会の改造が相互連関性を持ち人間社会進化の単一過程の両側面であることが指摘されるのである。^{注27)}かくして、Meadの社会的自己実現の中心概念は、衝動を基礎とした生物学的意味を持つ主我の概念である。Meadは次のように述べている。「主我の諸可能性は、現に移行し、発生しているそれ that に属しており、また主我は、ある意味で我々の経験の最も魅惑的部分である。それは、斬新性の現れるところに、また我々の最も重要な価値が位置づけられるところに存在する。ある意味で我々が絶えず探求しているのは、この自我の実現である」^{注28)}

Meadの自我・精神の発生論的自己実現は、以上のような主我と客我の相互規定、自我と他者の相互規定的意味にあり、主我と客我の背後に衝動と習慣の相互連関の意味が横たわっていた。デューイの自我の二側面は、同様に「衝動としての自我」と「習慣としての自我」^{注29)}である。(dynamic self-static selfの表現もある)、経験的自我は、社会性、連続性の意味を有する習慣の体系であり、社会的相互作用の過程に於いて、無定型の衝動が社会化され、蓄積された意味体系である。一方、衝動としての自我(主我)は、習慣の不適合、自己否定の表現である。この不適合=問題的状况に於いては、諸習慣が分裂し、衝動が誘発される。衝動の自発性及び客観の対象に対する根源的所有傾向によって主体は所有された自然の意味、特性と自己を同一視する。そこで、自我は自己になる。衝動としての自我の

自発的行為は、すべて自己の再構成、習慣の再構成を意味している。デューイに於いても、主我(衝動の体系)は、自己(存在するもの)を超越すると同時に、社会改造の発動の原因である。そこに自己実現、自己の探求の契機がある。主我(衝動の体系)とは何か。主体は、主体を知り得ない。それは、潜在的可能性、発達の可能性=Xである。主体が主体を知るのは、行為の結果であり、述語を持つことよってのみ知られ得る。^{注30)}かくして、実体的自我を否定する経験主義に於ける自己実現は、必然的に、実践性、経験が強調されるのである。この立場に於いては、主我は、潜在的可能性=Xとして状況に反応し続ける過程であり、「今・此処」という状況(場所)を表わす言葉である。「意識の流れ」から主我を記述したW. Jamesは、明確に次のように述べている。「「I」という言葉は、原初的には、まさに「これ」とか「ここ」とかのような場所 position についての名詞である」^{注31)}進化論に傾倒したpragmatistの進化の方向に関する問題は、このような主我の概念からして、アリストテレス的目的論の立場と異なる。主我は未来の何たるかを明言することはできず、固定した進化の到達点は設定し得ない。また、進化の要因を主-客いずれかに還元することも不可能であり、自我は、自然的・社会的相互作用の状況の中に現実化するのである。「人格性、主体性、主観性は、複雑に組織化された有機的・社会的相互作用を以て発生する終局的機能である」^{注32)}

V

我々は、Meadとの連関に触れながら、自我が社会的状況の中に現成化すること、主我を潜在的可能性=Xとして把え、自己実現が徹頭徹尾、「今・此処」の個々独自な一回的状况に依存する実践的色彩の強いことを考察した。次に、実現の状況(場所)とはいかなる形態か、一回的独自の状況と主体の生の実現過程に一貫性を与える理想・目的形成の連関を探らねばならない。主体(the「I」, individuality, subjectivity)が、潜在的可能性であるとし、又、それが現在の今・此処の一回的、独自の状況に生きているならば、その独自の意味を潜ませる状況の中で最善を尽さなければ、自己は自己に成らない。状況一般は存在しない。只、変転とした個々の状況の流れの中で、状況の諸要素、客観的対

26) Mead ; G. H, Mind, Self and Society p.177

27) ibid. p.309

28) ibid. p.204

29) Dewey ; J, Ethics (1908) p.362

30) Dewey ; J, A Syllabus (p.288) Cf. Mead ; G. H, Mind, Self and Society p.203

31) James ; W, A Pluralistic Universe, in the Philosophy of W. James (ed. by Kallen ; H. M) p. 157

32) Dewey ; J, Experience and Nature p.208

象を眼前にして、何らかの潜在的可能的自我を現実化しなければならぬ。潜在的自己は、未だ眞の自己として意識には与えられていない。潜在的自己（主我）と実践的行為の終局としての現実的自己の間は、「実践」という一線によって画されている。この区別は、「内的実現」internal realization と「外的実現」overt realizationにより表わされ得る。注33) この両者のズレ、不均衡の解消過程は、先にグリーンとの対応に於いて考察した行為の立場＝調整であり、論理的には、反省的思考と結合している。実現の場所・状況は、かくして独自の一回的な意味をその構成要素から作りあげ、状況の客観的諸条件は、自己実現に対する抵抗物、障害になる。環境の抵抗なしに自己は自己にならないのである。また、客観的対象の抵抗により衝動としての自我が自覚されねば、精神の発生と統合も不可能である。このような外的要因と内的要因（衝動・習慣）の相互規定の中に理想・目的が形成され、overt な行為へと与えらされる。こうした実現の過程は、自己表現の過程に他ならず、必然的に行為の技術性が伴ってくる。（しかし、この技術性は、社会的人間関係、相互作用に於いて、カントの倫理学で言われるような冷冽の意味を含む「技術的、technisch」にはならないことに注意しなければならないであろう）、また、その過程は、知性（精神）の機能としての構想力 imagination の能動的機能をも含む。デューイに於ける実現は、問題解決、実験的探究としての調整の中に位置づけられ、また、自己表現として芸術論の中にも明確に位置づけられているのである。芸術的感情にせよ。知的混乱、驚き＝問題的状况にせよ、すべて新旧経験の衝突であり、衝動を基礎としたその根源的感情、疑念の分節化、解決の中に自我は蘇生し、再構成される。実現過程は、状況の抵抗による苦痛と努力を伴う。自我は、その抵抗を通して自己の本質、知性（精神）を発見するのである。注34) 自己実現の教育的意味は、まさにこの点にあるのであり、デューイは、興味と訓練（努力）の教育上の二元論をこの実現過程に統一した。自我の本質が意図的行為の実現の終局（デューイは、意識的意図が現実の諸帰結と調和して現実化する時にのみ統合された精神は発生するという立場で、これを「心的統合の法則」とした）に於いて発見されるならば、自己実現は、経験をおいては不可能である。Nothing ever become real till it is experienced: Keats; J

我々は、かかる実現＝表現的行為の例を、芸術家、工芸家、スポーツマンに見ることができる。彼等の表現的行為のすき間のない経済性、技術性は、すべての個々具体的特殊な状況に於ける内的要因（習慣・衝動・理想）と外的要因（客観的条件）の創造的調整の産物なのであり、帰納と演繹の相補的知識の論理に支えられている。そして、彼等は、創造的調整の実現過程に於いて具体的状況の知的統制が可能になり、「自由」を獲得するのである。実現過程は、自由化の過程である。

自己実現は、状況（場所）の独自性、一回性によって、その都度の実験的、創造的探究＝調整に依存していたが、生の全体的過程から見ると、ある意味で行為の技術性、功利性が問われ、全体的生の過程を貫く糸＝主題、一貫性が問題にならざるを得ない。しかしデューイの自己実現は、先にグリーンとの対応で考察したように、理想 working ideal が主体の「自我の統合」に不可欠なものとして現れてくる。理想・目的の下での「自我の統合」とは、過去の諸経験全体を眼界にして、いかに全体的・包括的理想を構成するかに関する問題であり、「生の展望」outlook on life 構成の問題である。注35) Mead に於いては、この可能性は、自己意識の反省的性格に見出され、その場合、自我は、「展望の構成者、landscape organizer」である。デューイによれば、「生の展望」とは、「人生観に統一と人格的エネルギーの中心を与える諸条件、諸力の存在のシンボル」であり、主体的理想・目的の構成の問題である。それは、構想力 imagination を通して形成され得る。デューイ、ミードは、自己実現に於ける社会的経験を重視するが、経験の孤立性、無意識的性質をこの展望の必要性によって拒絶する。そこで、初めて、行為の功利的技術性は排することができる。何故なら、単なる現実を越えた理想的展望の光に照らして、その都度の直面する状況の諸要因は意味づけられるからである。即ち、理想、原理、目的は、個々の状況の錯綜を整理する為の分析の道具に他ならない。単なる機械的、量的社会化は、主体性、個の喪失「lost individual」につながる。個の回復は、個々の諸経験を素材にして、いかに生全体の展望を構成するかにかかっている。それは、常に現実的状况にもとずく生全体への志向である。注36) そして、その理想・目的の下で直面する状況に帰帰し、いっさいの価値基準を実験のフィルターにかけ、

33) Dewey ; J, Interest in Relation to Training of the Will, in the John Dewey on Education (ed. R. D. Archambault) p.272-p.283

34) Dewey ; J, Art as Experience p.58-p.81 p.282

35) Dewey ; J, Individualism-Old and New p.82 p.49 p.51-p.73,

36) Dewey ; J, Common Faith p.19, p.30

現実的状況に対する機能を問う。デューイの「自己統一、unification of self」とは、かかる循環的、連続的にして一貫した機能的理想の下での経験を意味していた。人は、こうした経験過程に於いて、理想が現実と調和する時、自己を再発見する。先の自己実現に於ける状況は、かかる機能的に再構成される目的・理想により全体が秩序づけられねばならない。しかし、一方に於いて、状況の独自性、状況に潜む意味の広がりについて、主体は、全体的自己の再構成を迫られる。デューイは、むしろ、この特殊にして独自な一回の意味を有する状況への自我の無限定な開放と実験的探究を強調していると言えよう。いつさいの価値、概念を仮説と見做す実験の論理が自己実現の根底に在るから

である。デューイのグリーン的自己実現批判の根拠は、まさにこの点にあったのである。グリーンの主観的立場に、我々は、状況による自己否定とそれを通した自我の再構成の側面を見出すことができない。そこには、主体の枠組による状況への一方的投企の側面のみが見出されるからである。デューイの自己実現に於いては、機能的理想・目的の下での自己限定による生の体験の側面と独自の状況に対する実験的探究から結果する自我の無限定の拡大の側面は相補的側面である。こうした相補的側面を以て進む自我の生成過程が、デューイの自然主義的経験論の「自己実現」に他ならないと考えられるのである。